

桐原家の人々2

恋愛心理学入門

茅田砂胡

中央公論新社





## 目次

1	.....	7
2	.....	25
3	.....	38
4	.....	51
5	.....	77
6	.....	86
7	.....	94
8	.....	111
9	.....	128
10	.....	148
11	.....	164
12	.....	196
13	.....	207
あとがき	.....	213





桐原家の  
人々

2

恋愛心理学  
入門



衣替えの季節になった。

薫風くんかうの五月が過ぎ、夏の気配の近づく六月である。

制服のある学校ではこの時期いっせいに衣替えが行われ、それまで男女ともに真っ黒、もしくは紺のクラスだったのが、黒白のペンギンに変身する。

この衣替えなるもの、往々にして遅すぎる場合が多い。五月も末となると関東地方では夏日も珍しくないからだ。強烈に照りつける日射しと、むせ返る熱気の中で、きつちりとした長袖を身につけて登校するのは見ているほうもそれだけで気の毒になるが、着ているほうはなおさらである。

それはそれはうんざりさせられるものなのだ。

男子はまだいい。暑ければ上着を脱ぐことができ。が、女子は悲惨である。

特にセーラー服を制服としているところだと、まさか袖をまくりあげるわけにもいかず、脱ぐこともできず、たいへん暑苦しいことになる。実際、この時期、女子からは、六月一日では遅すぎるという不満の声が頻繁ひんぱんに聞こえてくる。

その一日も、何と言っても華やかなのは女子のほうだ。黒一色のセーラー服が白地にあざやかな半袖のストライプになり、紺のジャケットの代わりに薄地のベストを身につける。今では制服のおしゃれな学校も増えているから、夏服と冬服ではスカートの柄がらが違ったりするので、ちょっと見には別の学校の

制服かと思うくらいだ。

さて、ようやく重い冬服を脱ぎ捨てられたことにほっとしている場合ではない。衣替えと前後して、中間考査の日程が発表されるからだ。

これがまた一種の博打ばくちのようなもので、不得意科目が重ならないようにと、皆、一心にお祈りする瞬間でもある。

しかし、どういう組み合わせでもありがたくないことに違いはない。

時間割の前で、絶望のため息がもの悲しげに続き、

「だめだ。英語と物理が一日目かよ」

「おい、誰かノート取ってくれないか」

自信のない生徒は慌てふためくはめになる。よくある光景である。

また、学校の学力にもよるが、どんなクラスにも真面目なのと不真面目なのがいる。

とことん不真面目なのは今さら試験の日程に眼の色を変えたりしないが、ほどほどに不真面目なのは

今さらながらに焦るあせものだ。

その一番手っ取り早い手段は、やはり、真面目に勉強している生徒にたかることである。

丸山翔平まるやま しょうへいもその一人だった。高校へ入ってから親しくなった友人を——もちろん成績は上から数えたほうが早い部類の友達を、さっそく当てにした。

「桐原きりはら。試験まで勉強つきあってくれないか」

「ああ、いいよ。どうせ明日からの授業はほとんど復習か自習だろうし、学校でさらっておけば家での負担も軽くなるし」

時間割を書き写しながら桐原真己まさみは気軽に応じた。

ここは県立呉里六郷くれさとろくごう高校。一年二組の教室である。文字通り、呉里六郷市にある唯一の公立高校だった。

一学年が五クラス、生徒総数は六百人をわずかに欠く程度の中規模な学校である。

呉高は進学校ではないが、だからといって決して学力程度の低い高校ではない。翔平のように、試験となると何とかしなければと焦る生徒が多いのも当



然と言えよう。

こういう場合、成績が良くて真面目で、さらにはおとなしくて言い返せそうにないタイプは、よつてたかつていいカモにされてしまう。

眞己は、そういう意味ではカモにされるタイプに分類される生徒だった。

至つて真面目だし、性格も、お人好しで控えめでおとなしい（と眞己自身は思っている）。

しかし、眞己の場合、見た目は本人の評価とは正反対で、大変に押し出しが利いた。百八十近い長身に、色の浅黒い、きりつとしたハンサム顔である。

こういう相手を好んでからかおうという物好きはまずいない。実際、眞己のクラスにも多少は不良がかったような生徒はいるが、誰も迂闊うかつに近寄らないことを考えても明らかだ。

「だけど、ノートの丸写しっていうのは駄目だぞ」

眞己が言うのと、翔平は明らかにそれを当てにしていたらしく、失望の表情になった。

「固いこと言うなよ。減るもんでもないだろうに」

「駄目だ。丸写しじゃ身につかないだろうが。わかれないところがあるなら教えてやるよ」

これは眞己の信念である。単なるお人好しならばいいように利用されるだけだが、眞己はさらにその上を行く。

迂闊にわからないところを訊こうものなら、本当に理解するまでとことん説明しかねないのだ。

「だいたい、一学期の中間なんて、そんなに大変なものでもないだろう。まともに授業が始まったのが四月の半ばだろ、一か月ちよつとの間に習ったことを復習すればいいんだから、楽なもんじゃないか」

眞己の名誉のために断つておろが、本気で言っているのである。

こんなことを言うと一部の友人から殴られるかもしれないが、眞己は勉強が嫌いではなかったし、試験でいい点数を取るのも楽しかった。

もちろん誰だって悪い点よりはいい点数のほうが

好きだろうが、そのために真面目に努力するのが眞己のおもしろいところである。

「といつても本人は悲壯な努力をしているつもりは微塵みじんもない。出題範囲は限られてるし、自分でも言つたように、二か月たらずの間に習つたことをさらへばいいのだ。」

しかし、眞己ほど勉学に熱心でない翔平は、当然ながら呆あきれたような顔になつた。

「一度でいいから、そういう変態的な台詞せりふを言つてみたいもんだぜ」

「誰たれが変態だ」

「一学期の中間なんて楽なもんだつていう、その台詞のどこが変態的でないつていうんだ」

やり返して、翔平はふと苦笑した。

「だけどおまえ、得なやつだよな」

「何が？」

「だってよ。普通のガリ勉が試験なんて楽なもんだなんて言つてみる。ぶつ殺してやろうか、こいつつ

て思うぜ。まさかほんとに殺しやしないけど、多少のいやがらせくらいなら許される気がするもんだ。なのに、おまえが言うのと、なんか力が抜けるからさ。そういうことを堂々と言い放つて憎めないところが得してるとつていうんだよ」

翔平のこの意見は大多数の生徒を代表するものと言えるだろうが、眞己は不思議そうに首を傾げた。

「俺はそれこそ、そんないやがらせをする暇があるなら勉強すればいいのにつて思う」

翔平は両手を広げて見せた。お手上げだ、と言いたいらしい。

「おまえさ、他の二人と競争でもしてるのか？」

「他の二人つて……みやと猛たけろのことか？」

「そうだよ。同学年に二人も兄弟がいるわけだろ。おまけに、おまえたちみんな勉強できるみたいだしさ。——やな兄弟だよ、ほんとに。まあ、それはおいとくとしてもだ。親おやだつて、一番成績のいいのを引き合ひに出して、もっと頑張れとか見習えとかつ

て言うんじゃないか？」

確かに眞己には同じ学校、同じ学年に二人の兄弟がいる。

要するに三つ子である。

しかし、それも今となつては『三つ子だった』と言うのが正しい。

なぜ過去形で言わなければならぬのか、眞己は一言も説明しなかった。むしろ表情にも態度にも、そんな素振りには微塵も出さなかつた。

「そういうのは全然ない。だいたい成績を気にするような親じゃないんだよ」

平気な顔でそんなことを言った。

しかし、これは翔平にはますます信じがたいことだつたらしい。疑わしげな顔になつた。

「ほんとにかよ？」

「ああ。うちの親、大ざっぱな性格してるからな。俺たち、いつも三人揃つて親に成績表渡してるだろ。一度に三枚も見るのは面倒だねなんて言いながら、

ざつと見ておしまいだぜ。あの人、自分でもどれが誰のかなんて意識してないんじゃないか」  
わが身とその家族を顧みて、翔平は辟易したようである。

「子どもが変態なら親も変態だな」

妙なことを妙な確信を持つて断言した。

呉里六郷は関東のはずれに位置する小さな町だ。

従つて、呉高の置かれていた環境も、間違つても都会的とは言いがたいものがある。

最寄り駅からたつぷり二十分は離れている上に、近所にはゲームセンターだのカラオケだのの娯楽施設は皆無である。それなら住宅地なのかと思いきや、半分は確かにそうなのだが、残り半分は実に緑豊かな風景であつて、畑があり水田があり、小川が流れ、規模こそ小さいが、キャベツ畑にぶどう畑、それに西瓜畑までがずらりと顔を揃えている。

夏休みが近づくと、みごとなきぎざぎざ模様の大きな西瓜が、地面にごろんと転がっていたりするのだ。そうするとよからぬことを企てる族やからがいるもので、食べごろになった西瓜をひとつ無断でいただいてしまおうと考える連中もいるらしいが、この辺りの農業主は半端ではない。おもしろ半分に出すと、とんでもないことになる。

呉高へ上がって来た男子生徒、特にそういう悪戯いたずらの好きそうな体育会系の男子生徒は、真っ先に先輩からありがたいご教授を受けるのだ。

「いいか。この辺りの畑には絶対に立ち入るなよ。特に西瓜は駄目だ。恐ろしいことになるからな」

十五歳の少年にこんなことを言うのは、かえって興味をそそる結果にしかならない。

当然、どんなことになるんだと後輩は質問する。すると先輩は自分も昨年たつぷり脅されたことを思い出しながら、怪談でもするかのような口調で言い聞かせるのだ。

「どんな小さいのひとつでも、手をかけたら最後、退学になる西瓜なんだ」

後輩たちは、まさか、と笑う。

そりゃあ盗みはよくないことだ。しかし、日本の法律は未成年者に寛大かんたいにつくられている。

学校側だって西瓜のひとつで生徒を退学にはしないだろう。若気の至りで嚴重注意ぐらいですませてくれるのではないか。

「甘い！」

ここぞとばかりに先輩は声に力を込める。

「それならやってみるとは俺は言わないぞ。間違はなく、おまえたちに明日はないからな」

さすがに後輩も不安な顔になる。

以前、そんなことがあったのかと尋ねると、先輩は思いきり難しい顔をして、たいていの学校に必ずある『伝説』を話して聞かせるのだ。と言っても、先輩もそのまた先輩から聞かされた話である。

「何年前の夏休みに、度胸試しのつもりで西瓜を

盗った連中がいたそうだ。もちろん本人たちは軽い気持ちで、見つかっても畑のおやじに叱られるくらいのことだろうと甘く考えていたらしいがな。畑の持ち主は証拠写真をそろえて、すごい見幕で学校に怒鳴り込んだんだと。この学校では泥棒を飼っているのかつてな。親も学校もひたすら謝ったが聞いてもらえず、とうとう退学にされたそうだ」

西瓜一つで退学とは過激な話だが、証拠写真とはすごい。どうしてそんなものを撮ることができたんだろうと後輩は不思議がる。

「この辺りの畑はみんなそうだが、特に西瓜畑の持ち主は狂のつく防犯カメラだからな。カラスよけのかかしには防犯カメラが仕込んであるし、地面には西瓜に混じって西瓜型のセンサーが設置されている。夜になれば畑全体に赤外線が張られて、踏み込んだだけで警報が鳴る。おまけにその警報は警備会社に直通だ」

後輩は呆れ返る。冗談はなしだとふくれっ面で先

輩に抗議する。たかが西瓜にそこまで暇と金をかける馬鹿がどこにいるというのだ。

だが、先輩はきっぱりと断言する。

「この近くにはごろごろいる」

呉高近辺の農家は二つのタイプに分けられる。

一つは、土いじりが好きで仕事のかたわらに興味で野菜をつくっている、あるいは定年を迎え、都会を離れて田舎で生活するつもりで移り住み、家庭菜園くらいにしておくつもりが、だんだんおもしろくなって、本格的に野菜づくりに熱中するようになって、趣味人タイプである。

趣味人であるだけに前歴も多彩だ。某精密企業の技術者だの、某ゼネコンの取締役だの、はては捜査畑で四十年、めでたく勇退して今は孫の遊び相手が仕事でも、何か事件が起きると嬉々として身を乗り出すなんていうのまでいる。

もう一つは先祖代々の土地持ちで、しかも非常に勤勉な農家の方達だ。地面をあそばせていることに

罪悪感さえ覚えるタイプである。

立派な水田はもちろんのこと、畑ではジャガイモ、玉葱、キャベツにほうれん草などの野菜をつくり、果樹園を持ち、温室で果物を実らせている。そればかりか、ちよつとでも空いた地面があれば、茄子にプチトマトにとうもろこし、胡瓜に紫蘇にパセリ等、何でもござれである。

そうした先祖代々の地主さんたちは、自分たちの収穫物を心から愛している。量より質をモットーとしているから、当然、手のかけ方も違う。そこへ新たにやつて来た金と暇と技術の持ち主が協力しあい、乗りのよさも手伝つて、この辺りの畑はたちまち一大危険区域と化したのである。

「野菜や西瓜だけじゃないぞ。家畜も危ないんだ。もしはぐれた鶏を見つけても近寄るなよ。できれば保護して持ち主を捜すように」

さすがに後輩も愕然とする。  
どうして自分たちが鶏の保父さんまでしなければ

ならないんだろうか。

「家畜を飼つてる人は、この呉高生徒に恨みがあるらしいからな」

前にも言ったが、呉里六郷は都会とは言いがたい場所である。最近では瀟洒な住宅も増えているが、昔ながらの垣根に平屋の農家もたくさん残っている。鶏や牛などの家畜を飼っている家も多いのだが、そういう人たちは戦後の食糧難のころ、お腹をすかせた学生が食料欲しさに農作物や家畜をぶんどつていったのを、いまだに覚えているというのだ。

食糧難と聞かされたところで、今の若者にピンと来るはずもない。もしかしたら初めて聞く言葉かもしれないが、文字どおり、一日中お腹がすいていて、なのに食べるものが何もないのだと思えばいい。

コンビニやスーパーなど、無論あるはずもなく、お金があつたつて、肝心の食べる物がどこにもない。何しろそのちよつと前まで、日本中が食糧不足で、ひどいときには麩や雑草を食べて、かろうじて飢

え死にすることをしのいでいたという時代である。

当時の呉里六郷は今以上に農作地が広く、家畜の飼育も盛んだったというから、都会に比べて食料の面では恵まれていたと言えるだろう。

それでも、肉などはまだまだたいへんなご馳走で、そう簡単に庶民の口に入る物ではなかった。しかし、お腹の空く若い世代にとって、農家で飼われている家畜類はたまらない誘惑だったに違いない。

そこで空腹に耐えかねた我が呉高の先輩たちは、悪いこととは知りつつも、農家から鶏や兎うさぎをこっそり失敬し、しまいにはなんと豚を一頭かつぱらつて、バーベキューにしてみましたというのだ。

これはもう、れっきとした犯罪である。豚一頭と言ったら現在でも決して安くはない。まして、何より食糧の貴重な当時だ。『若気の至り』ですまされるはずもなく、大問題になったという。

この時はどうにか示談が成立したらしいが、畜産農家の人たちは数十年がたった今でも、その恨みを

忘れないでいるというのだ。

先輩はいまいましげに言う。

「鶏くらいでやめといてくれりゃあいいものを、そんな大昔のことで、こつちを目の敵かたきにされても困るんだが、とにかくこの近くの畑には手を出すなよ！ 下手をすれば俺たちにまで監督不行き届きのとばっちりがくるんだからな！」

先輩たちは半信半疑ながらもおとなしくうなづく。体育系の部活動において先輩の命令は絶対だから逆らうわけにはいかない。というより、普通なら先輩のほうに度胸だめしに、どこそこの畑から何かを持ってこいと命令しそうなものだ。

それを絶対に手を出すなどは、妙なりアリティがある。

はたして、近くの西瓜畑では、休憩を取っている気難しそうなおやじさんが、煙草たばこの煙をくゆらせながら、監視カメラの映像を眺めつつ、

「近頃の学生は肝が小さくていけねえ。首が飛んで

もいいくらいの覚悟で乗り込んでくるような奴あ、  
いねえのかい」

と、無茶苦茶なことを言っている。

要するに暇なのである。

中間考查一週間前になると部活は休みになるため、  
今日が最後の練習だった。

呉高の広いグラウンドを二等分するかたちで、野  
球部とサッカー部が練習を行い、そのまわりを女子  
陸上部がランニングしている。

「ラストオ！」

威勢のいい声が響いた。二十週のランニングも最  
後の一周ということである。

十人ほどの部員はぜいぜい喘ぎながら最後の一周  
を走り切ると、汗だくになって足を止めた。全員、  
もう一步も動けない状態だったが、その中で、他の  
みんなが立ち止まったにもかかわらず、止まろうと

しない部員がいた。

「ちよっと、桐原！」

呼ばれても気づかないようで、さらにトラックを  
走り続けている。

「桐原！ 聞こえないの！」

三年の部長に大声で言われて、当の桐原はやっと  
立ち止まり、不思議そうに振り返った。

固まって呆れたように自分を見ている部員たちに、  
ようやく事態を察したらしい。

さすがに気まずそうな顔になって戻ってきた。

「どうも。すみません」

「何やってんのよ。ラストのコール聞こえなかった  
の？」

「ちよっと……考えごとをしてたので」

「走りながら考えごと？」

部長のほうが呆れ顔になる。

「余裕あるじゃない。何ならもう五周くらい一人で  
走る？」



「遠慮します」

やんわりと言ったのは桐原猛。

念のため断るが、れっきとした女子である。

引き締まった肢体と思いきり短くした髪は、一見少年のように見えるが、実際には目鼻だちの整った美人顔の猛をいっそう目立たせている。

入学したばかりの一年だが、猛は三年の部長より五センチは背が高かった。百六十五はある。

その部長のお小言はひとしきり続いたが、結局は次から気をつけるようにという平凡な締めくくりで終わりになった。

やれやれと思いつながら更衣室へ引き上げる。

体操着を脱ぎ捨ててシャツをはおったとき、猛は奇妙な違和感を覚えた。

着慣れているもののはずなのに初めて着るような気がする。それに、なんだか大きいようだ。

ボタンをかけようとして違和感の原因に気がつき、猛が思わず舌打ちすると同時に、隣で着替えていた

人間が不思議そうに言った。

「桐原さん。それ、男ものじゃない？」

「らしいわ」

ほそりと答えた。

襟えりの先が大きくて尖とがっているし、何よりボタンの位置ちがいつもと逆だ。

「みやのと間違えたみたいね」

猛はよく私服で男物を着る。それだけに何気なく袖を通して無意識にボタンを掛けてしまったらしい。まったく、あの男兄弟は、身長はおろか体格さえ、いまだに自分とほとんど変わらないように見えるのだから、嫌になる。そのくせ体重だけは、向こうのほうがしつかりと余分に重い。

これをとつてもわかるように、決して自分が男まがいの筋肉質な体格だというのではない。向こうが中身に反比例して、一見やわすぎるのだ。

これがさすがに眞己のものだったら間違えたりはしなかったのだが、それにしても、今まで気がつか

ない自分にも嫌気がさした。なのに、部活で一緒の知り合いがご丁寧にも注意してくださる。

「家で着たときにわからなかったの？」

「ちょっと……うっかりしたみたい」

「だけど一日着てたんでしょ？　なのに今まで気がつかなかったわけ？」

「ベスト着てたし、みんなもわからなかったんじゃないかしら」

女子の夏服には各人の好みで前ボタンのベストがつき、襟元にはリボンがつく。猛は標準以上の長身だから、少し大きめのシャツを着ていても、よほど注意して見なければ気づくまい。

「あのさあ。よけいなことかもしれないけど、桐原さん、ここんとこ変だよ。練習にも身が入ってないみたいだし、下手すると先輩に呼び出し食らうよ」

本当に大きなお世話だ。

ここ最近、気分がささくれだっついてつまらない失敗が目立つ。そんなことは自分でもわかっている。

わかっていられるだけにいちいち注意されると、これまた腹が立つのだ。

しかし、猛は顔ではにっこり笑って、

「気をつけるわ」

と言った。

猛は内心の不満や文句を顔に出したりしない。

人間関係に波風を立てるようなことを言ったりもしない。無理に我慢するわけではなくて、そういう方向に意識が向かないのだ。これは持って生まれた性格である。しかし、だからと言って、決して何も感じていないわけではない。

表に出さずに内側にどんどんためこんでいるから、精神衛生にも美容にも大変よろしくないことになる。ついでに学業にも大いに差し障りがある。

明日からは試験に備えて部活も休みになる。頭を切り替えて勉強に集中しなければならぬのだが、とてもできそうにない。

それは多分、同じ顔の『兄弟』も同様のはずだ。

猛は深いため息をついた。

同じ頃、桐原三兄弟の最後の一人、都みやこは、校舎の裏にある道場にいた。

これも念のため断るが、れっきとした男子である。桐原家は今では珍しい大家族だった。その構成は眞己、猛、都の三つ子兄弟と、歳の離れた長男長女、彼ら五人の両親、それに母方の祖母の総勢八人だ。

もつとも父親は有能な企業戦士で出張さんまいの生活である。本人はそれが苦痛で仕方がないらしく、わずかでも暇を見つけると飛んで帰ってくるのだが、それでも顔を合わせるのは年に数えるほどだ。

同じように長女の麻あ亜こ子も長男の零れいも、めったに家には帰ってこない。

麻亜子は学生時代から都内のマンションに一人住まいをしている。東京の大学を卒業後、服飾関係の会社に就職した。バリバリのキャリアウーマンだ。

零も一応会社勤めだが、こちらの就業内容は不規則きわまりない。一か月も自宅にいるかと思うと、海外へ出て半年も戻ってこないこともある。

つまり、常時家にいるのは都、猛、眞己の兄弟と、母親の豊ゆたか、祖母の締ていの五人ということだ。

ここまでは順当で何の問題もないのだが、問題は今年高校へ進学したばかりの三つ子の兄弟だった。

繰り返すが兄弟三人のうち、眞己と都が男、猛が女である。

何ともややこしいが、さらにややこしいのが彼ら三人の容貌だった。

眞己は前述の通り体格のいい男子である。身長はすでに百七十五を越え、かっつきりとした顔の輪郭に太く濃い眉まゆ、浅黒い皮膚の色など、男性的といつていい容貌である。

眞己が初めて会う人に、自分には三つ子の兄弟がいると話すと、相手は露骨な興味を持つ。同じ顔が三つもあるのかと言う。眞己が、うち一人は女だと

語ると、今度は多大な同情の表情を浮かべるのだ。

その言いたいことを推理すると、こんな男くさい男に似ているのでは気の毒だということだろう。

そこで猛に引き合わせると、たいていの人は驚くことになる。

名前こそ男のようだが、猛はすらりと姿のいい、色白の美人である。身長があるのと、髪を短くしているのでボーイッシュな印象だが、整った顔だちといい、涼しげな印象といい、眞己とは似ても似つかない。

ああ、やっぱり女の子だからと相手は思う。

中には似ていなくてよかったねと、面と向かって猛に向かって言う者もいる。

それではもう一人の男兄弟は、眞己に似た精神な容貌なのだろうと思いきや、都に出会って、相手は今度こそ絶句することになる。

都は小さい頃から、この名前にたいへんな迷惑を被ってきた。

確かに世の中には女名前の男性もいる。現に彼の父親の広美がそうだ。クラスメイトにも泉、栄、忍など、どちらとも取れる名前の男子がいた。

しかし、自分ほど、頭から女の子だろうと決めつけられてしまう名前にはお目にかかったことがない。さらに問題なのが都の顔だちだった。

同じ男兄弟であるはずの眞己にはまるで似ていないのである。むしろ異常なくらい猛に似ていた。

小づくりのうりざね顔に、くつきりと線を描く瞳、細く長く伸びた眉、形のいい唇など、男のものとは信じがたいくらいだ。肌もなめらかに白い。

本人はこの名前も、この容姿もたいへん嫌がっているのだが、彼らに初めて会う人は、ここに至って完全に困惑の表情になる。さらには遠慮がちな、しかし、はっきりと疑わしげな眼を眞己に向けるのが、決まり切った反応になっていた。

どう見ても三つ子には見えないと言うのだろう。もっと具体的に言えば、どうして眞己だけがこう

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。